



曲亭馬琴戲作序文集

完

~ 13  
3505



3505

渡部白鷗纂輯

曲亭馬琴戲作序文集

明治十一年  
仲秋官許

渡部氏藏版



序言

此序言夫人志路其曲亭  
馬琴の御代戲作の序言  
此序言と出集先傳等  
一孫と云ふ物に及ぶ  
其の巧む句調の妙なり

きし手美と云く能うたていし  
まにやいふも惜しきまにふ  
まし直まゝと模本に作り  
まゝ同好れ法君まふつゝふ  
む

明治十二年初秋

渡部 温彦

曲亭馬琴戲作序文集

渡部白鷗纂輯

第一 皿屋敷浮名の深付

狂人と逐ふて走るものゝあら狂ふまゝのぼつとつともその態狂人  
と等し。童子の為よ書と綴るものゝ貌既よ老とりども。それあは所童  
子ふ似たり。視るもの愚ありとくく必ぞ是は笑ふ。それ智ふ及ぶべく。  
其愚ふ及びが。余童子の為よ書と綴るとども。未だ嘗て童子の意と  
得む。多くいひてかきとせしむ。吁實ふ難哉

第二 書名知まふ

現や里巷訶謔の曲も。由来れる所なり。さきむむうし物の本。竹取大

和伊勢物語ハ歌より趣向と産出せり。今又是て父母とて思ひはるぐ  
手廻唄一ニテ御代の春毎よ。つらもつらぬ六またの繪草紙七ツ八く  
たいふた事なぐら。九ツあつては新板物。十ツうら賃まは此主を。誰と  
書れてきたぐ迄御評判と希ふ。板えの口上き。筆のけづみ。拍子よく。  
漏さぬ序文九丈ふ任する画工もなぐみどち。食さうやだてつらとら。  
年の宝珠のたき椿八千代の後まを壽くとつら。

第三 書名知れぬ

釋氏とりつて定規と。老莊とりて準繩と。作者が胸の匠と。はのう  
細工よ手と組のの。削るが如き敗筆ハ。只おしくと果敢とらぬ。鋸るるで  
みんり錐かんるで綴る訛言鑿よ。三十てうらの繪さうし。の。勾尺はう

師匠ゆるく。獨りまらげさうぬ馬鹿物と。人のつらども世渡りの足代踏で  
人あみふ。作料それを己られを。大厦高樓のめをなたより。鄙の田舎の白  
屋まで。言の葉よ述図よらつて。鶴山と題すれども。高くつらぬも  
てつらび。或は年王その本。あまふらそのあつらやと。手前勝手と夕  
仕事。内造作し手間どつらも。請負普請で休まれば。下拵の草稿と。やつと  
画工よつら。霎時煙草よまるとら。千歳の命と延るといへん。飲  
第四 伊達模様判官負  
夫土手馬と葛西の陽ふ繫ぎ。又牛島とそらせん寺の野よ咄たる。むししく  
文治高尾ふ義經の。浮名流せし。衣河及とも。竭ぬ泉三郎忠衡が精忠ふ説  
諦したる。黑白論碁盤ふ。頬杖はくぐと男之助忠信ハ。獅子奮振のつら事

師牡丹ふあゝでそけ頂の紅葉豆腐も彼君ふ些由縁の三郎平。こゝる浮  
 世ハ渡平ガ鉛ぶつまう坊の弁慶ガ。その隠宅ハ道哲庵むきぶる露の  
 みらけくの。あこ木とやぐて二本ガ隠謀推名の術の鼠う。化けりいせ  
 一源九郎助。夫婦狐ハ赤の飯奴女片岡がま。炊い君が為ふといへばふ。  
 岩手の局狼婆々々。伎倆ハ山と山どりけ。そのあざり尾の長物語馬鹿く  
 一と思へども。獨りかも寝てく。され絲バ。今茲も筆とるりのあしし

第五 膏橋河原祭文

聞しめせく。あまどこの春新板物。趣向ハ浪華東堀ぬ。うゑ案トも何  
 負。作者の箱と室咲の梅より先ハ賣出しハ。皆さぬぬぞんと板ええよ。  
 所ぐくとして名みゆ。油町く。思ひけく。油屋ハ赤久松ガ。仇ハ浮名の

世話時代。年々さみのん相似たる。一夜づけやら門附やら。年頭歳暮の間  
 小合せんと。画組書入何も彼も。一荷ふ受む野崎の急作。あくら山と  
 山家屋の推菟塔ハ詞の質種金ガ敵と思義の實事。いづれ勸善懲惡の  
 世界定の幾筋書宵延の燈心費を甲斐ハ立滅のせぬ六冊續ハ今茲で到  
 頭三十三年。まど頼させぬ合巻の業ハ入りの業ハ従ふ。戲作の口調と漫  
 小序を

第六 女夫織玉川晒布

曉の馬の鈴ハ新驛泊の目と覚。一晡の辻駕ハ堀の内詣の足ハ代ま。或  
 ハ玉川の鮎獵ハ雙郷の靖輔と音げ。あるハ矢口の新田辰ハ池上の  
 酒徒とかりハ性も光陰還るも月日。仇ハ過ると惜気もま。人さぬぐふ

樂もの。ゆるぐ中ふも小家の珍説。扱此世界の磯貝島川の。でも知まよ  
 復讐の故と祛て新しく。筆小織成を作者の調布。實うう出と嘘と白思ひ  
 つく間もゆるぐを。颯と趣向と練揚し。おも勧懲の一端機きりつとつ  
 りてふ丁々と。表紙の例の摺附ふく貫きとめぬ絨糸も。長らる二丈六冊  
 の。製本頗張込し。永壽仕入の正銘正札筆耕あつう。徳用向憚る  
 ぐ外々と。以見々々の上おん求め。なされ下ささいべくとり

第七 ゆるまご紅葉の合傘

故と温て新を知る。土手物買ふ似たるべく。隠たると顕し奇と行ふ。  
 小説者流の僻事あつん。年々歳々作相似たれど。再々念入趣向同し。  
 らむ。オウもオウも。好とそ物の上手あはと。書肆ふあごうけられて

頗兼が北畠伊勢の國司の時代物。あはど勧善懲悪なごう。大まふお世  
 話場よりませし。筆の笠屋の三勝咄。些少画工へ詠の。朱書のあう半七  
 が。七うの足らぬ六冊物。雅俗今昔合巻の。吉例うらう。今茲もあうけて。  
 屋根白妙ふ霜降月。あつらひ堪らぬごつとひまうせと。墨さうくと推摺て。  
 女房寝さんせ今宵も夜延。大をういそを不動明王の。利益よりつと三日  
 三夜作り出せし。あつらひの冊子。亦まんごうでいあはごんと。ゆるい則善巧方便  
 ちが板元ふ勢ひつひんと。あはでも序お弟と戯れと述ぶ

第八 梅櫻對女兄弟

世尊の妙法三世と説く。輪回の車の輪の如く。坦地滑途つる。又。犬の  
 糞の上までも。相環らむとりふとあし。抑々何とる三世とりふ。未来一世現在

一世過去と合せて三世あり。是とまぢりく身ふとれば一日の中も三世あり。思ふにせぬが是未來。そのまるとたが現在。ままひ果れば過去とあり。豈帝前世と今生と後世のみと。も三世といはん。善惡迷悟初一念。未來より来る現在も。さのつらみの過去も。むやと。思ひまへ。過一頃。種月牧之が旅宿の夜話と。種小時繪の下地筆。天田屋野梅が香と。わづ。彼神助が三世の奇談。ふ詞の花と咲せても。尚含ある姉妹が。三國巔と裏富士と。甲斐と越後の割外題。さういひ。つ方寸の六塵五慾と拉ぐ。是も勸善懲惡の端あるべしと。自序してのふ

第九 辻花さうし

智者仁人の世と。うらみみて。後生も。嫉憐む紙。大きふお世話とりよと

勿れ。楊朱が白糸と見え悲し。只そは。深り易き。為る。墨翟が岐道と見て。ち泣し。迷ん。と思へ。朱も交る。その赤く。團炭屋の傭工。黒くる。十善海道。三惡道。右乎左乎。彼方。是方。問ざる。必む迷ふ。情の深ると。色と。ひ。道。暗きと。迷と。い。説經俗談。多る。中み。阿讚。茂平。が情縁。艶曲。既ふ。二本。あり。あ。の。と。ど。も。非義の情。不縁の慾。へ。摸擬。ま。べ。の。つ。ま。今。その。胎。と。奪。ひ。骨。と。換。忠臣烈女の事。と。綴りて。書肆の。謔。と。塞ぐ。のみ。閱者。を。お。序。と。固。と。せ。で。よろ。く。奥。齒。と。敵。と。け。る。高評を賜へといふ

第十 縁むまびふみの定紋

邈古の千劍破たる神の世。ふ。教。鳥の跡。認。果。浮名の手。習。ふ。恋のい

ろはの浄書とあびる思ひの數くと。浚草紙も五六冊が七吉三がらぐら  
 草さうらべかちよ判兵衛も。やうの麿ある本郷の八百屋萬の神おろし。  
 棚ゆらりとそいそぐき。睦月のころの松竹梅湯嶋ふくけー額風爐の。  
 釜屋碓兵衛が山ゆたひ。花いろ色悪二枚目の小判の舌と富樓那の弁長  
 坊主吉三が今般の癸心懺悔々々の河洗垢離ふ。六根清浄吉祥かん縁  
 生めでたな土左衛門傳吉が狭氣も。稜のどとたる盆前の備阿針と兼帶  
 ある下女のお杉をかよびあは。檜木不動の灵驗利生不思議もあればある  
 トの舊兵衛素生と問へば下野や室の八島の夕煙絶ぬ古跡の掲焉縁起  
 端談後妻のが篋が胸へり利の時代世話ある新趣向長物語と断縮短  
 き毫ふ自序まといふ

第十一 姫万両長者の鉢木

木佛と焼て霜の朝と凌ぎへ。悟りまださる悪洒落も。盆樹と伐て雪  
 夜と暖めへ。せんうさふさの以馳走ある。苦しくも降来る雨りみこの  
 崎さの渡り小家もゆらぬふ。と詠たりー萬葉集小歌られた。駒と  
 めく袖うち拂ふ。うげもなうさの渡りは雪の夕ぐれ。と摹擬られたる。  
 されば詠歌ふ等類なり。其角が句集小兄弟ある。物うか對りる。似て非あ  
 り。そあふ小趣向なうらやいと。思ふ物うら凝らねども。薪の樵うー鎌  
 倉と。小田原小せー北條時代記佐野常世と次郎左工門よ。どろも直して  
 かたつた。ゆくりの色は八橋の嬉手小實登る。姫萬両の妹伏の縁日物  
 る。忠臣節義の鉢の木と。並立する室の梅。五鬢の小松あらたませて。櫻



小壽こじゆく新素しんそ新板しんぱん卷まきの端はたの半頁はんぺいの画工がくの可寸利かすんりと吉例きちれいめらるる序しりら

第十二 多岐たぎなるつめ願ねがひの糸竹いとたけ

みかぬみかぬ存ぞんむむううしくしく芦あしが散ちる浪速津なみはや小枕こまくら久ひさととりりふふものものららるる親枕おやまくらの讓あづかりりと受うて重箱ぢゆうせうの家富栄けふちゆきたるたるままくく小汁こじゆ椀わんののああららぬぬ知しるるととしてして知しららざるざるとと印いんとと血ちととせせよよとのの教かへとと忘わすれれ抱屋敷かへやしきの坪つらの敷しきよろよろ壺つがの碑いざなららののくくららでで未みの弁へんののままををけけ松山しょうざんよよ猪口ちゆうこう々々通とほひひををめめがが因果いんぐわい中弁ちゆうへんの中宿ちゆうしゆくへへ井いををぬぬりりてて腰高こしだかののかかううくとと疎そふふ手塩てしおふふけけ子こ皿しらををああけけれれどど焼物やきもの皿しらののややたためめのの女房にようぼうととままをを得えりりるる箸しゆみみももかかららぬぬ浮名うきなとと流ながしてして本膳ほんぜんの善ぜんととどどろろ失しひひししようよう浅黄木地あさぎきぢ蠟ろうやや浅黄椀あさぎわん黒くろいい蠟塗ろうぬででるるくく廊らうららよよ

ひ盆ひぼんののままひひ物もの在あひひとと世よ小唄せううた願ねがひの系けいの二上にじやうりりもも銚子しやうしととかかくく一趣いつしゆ

向むか本ほんづくづく所ところをを勸善こんぜん蝶脚てつかく二にの膳ぜん三さんは善悪ぜんあく邪正じやせいの次第しだいと分わててるる献立けんりつもも即すなは

席料理せきりやうりの急拵ききぢゆうふふ腋わきよりより盆ぼんのの腋目わきめももぬぬるるぬぬ戲作けさくもも名なめめ大だいひひ附つ真ま

名なもも假名かりなつたつた思おもひひ信しんたたのの音訓おんくん交湯桶かうたうづくよよみみささつつててももくくのの筆畊ひつぎふふむむ

つらつら丸まるのの盃さかづきでで三さんのの三冊さんさふ合あせせてて六冊ろくさふ時代じだいままどどのの世話せわたたつつらら音ねくく

食くせるせる新しん手ての振舞あそびととるる所ところのの誨おしててたたとと要あ時とき机きの大胡座おほあぐら夢ゆめの世話せわ中ちゆう

寝ねててもも居ゐられられどど秋あきうう仕込しこむむ切溜きりづみののららとと附込つこむむ去歳こぞの成なり声こゑいいとと

くく椀わん久ひさのの草紙くさしささううとと評判ひやうはんよよううくく頼たのまま奉ほうままふふぬぬんん

第十三 やゆやゆとと莊子しやうしててめめくくの花簪はなざし

一年いちねん三百六十日さんぱくろくにち長いながい月日げつにちと思おもへへどどもも元日げんにちののつつはは間まよよららとと大晦日だいげきにち

の地尻ふらう。喜樂と詔バ相店うて憂患の合壁より。禍福吉凶  
 善悪邪正甚相遠るは是と左右の足ふ譬ふ左足進め右足止り。右足進  
 りべ左足止る。善悪もまごかくの如し。一善進め衆悪退き。百福来れば  
 百難息む。あの塚と免るものと聖人といひ佛と稱を醉生夢死の衆生  
 の上品蒼隸百々夢多るもの。大往生と遂るふ庶し。感ドレ動き動て萌  
 毛。一念あふ起るとたへ。善ももろく悪ももろく。禍福吉凶招  
 く不隨ふ。進一止念々無量業報のそ中みなり。されバ釋氏の輪回  
 の説も又莊周が蝴蝶の論も迷ふと悟るのあつと出む。太子の夢殿盧  
 生が邯鄲大覺つら大智出づ。それ初夢の富士小鷹茄子も及バぬ江戸  
 紫の摺附標紙の合巻の冊子小莊子の蝶昏の筭飛で出るとい昔の小

唄菜の葉ふ止れも五十年。工夫小枕を推ととい。亦嘘をうらう。作者のや  
 たらめ。狂言狂序も本心違へむ。只勸懲の趣と述ぶ

第十四 今戸らやげ女西行

浮薄貪慾世渡りの一本綱と踏外して。世ふ捨らる。白徒の多く。富貴利  
 達と壁と見て。天命を知る世捨入の鐵の草鞋を索ても稀あり。さればとそ  
 りと圓頂黒衣ふ彼一蓋の檜笠。且一條の竹杖突て。旅より旅ふ乞食と  
 して。歌も詠ねど貌のみ。西行めりて事易く。閑居垂帷ふ戸と出ねど  
 も。居ぬづらふ。名所と知り。酒も喫升鮮魚も啖へど。よくそは言と行  
 ひの。西上人は耻ざるもの。寔ふ難き所為るべし。宜あり。今もいありへも。  
 眺る富士のめらる。糸と寧高きみ誇らんよう。低き小遊づらぶるげあ

ら。思ふあつと善智識みて。話説を輪回應報の。おせ物語も勸善懲惡。今茲も程まくを竹の。トよ作りは急案ふ。古人けの子が佛と。うせ  
一女西行の。離雛の昆布また海鮮の蒲焼。皆似て非なる物の本。とらおめ  
へどもつつまも。世は捨られぬ用心ふ。随分念入自序まらふ

第十五代夜待白女の辻占

人小八字の生来り。命小八位の東西あり。そは吉凶の任まれば分と量  
る小足らざるこなく。貧富の際小惑む。彼天命と樂むと。名づけく  
知命の達者と。いふ衆人多く。是と知らば。命吉あり。愚福あり。毒壽あり  
の。その甲斐なく。命凶あり。夢始醉終。役々として。煩悩たえ。い  
への人は。是と曉まふ。人は一期と夢。譬へ。枕中記の一篇あり。又槐安が

一紀事あり。て窮達栄枯得失の理と説く。其精妙あれども。讀ぬごちあり  
蝴蝶も華昏も。迂遠と一足飛ふ。推さる。この這冊子に。正月二日の初夢小  
も。大晦日小假寝の。久松もど。夢みごと。見せる作意の魂膽と。邯鄲小せ  
一悟道の捷徑。もど。野暮も筋夢中。趣向の婆娑羅婆底演。この夢と  
を咬と。いふ。御託は白澤猿枕到底の大笑。空船で。なるれども。春の  
睡の目覚。小。今茲も。か。戯れて序を

第十六代大師河原撫子譚

夫陰徳の耳の鳴が如し。已ひり。知りて人は。是と。あ。ば。余りと。い。ども。必  
陽報あり。又隠隠の。軒睡の。ご。已。覚ら。び。人。是と。知る。這。と。り。必  
を悪報あり。善と作を。ふ。大。あ。ら。び。と。己。と。み。く。是。悪と。為。ふ。小。な。る。を

とて行ふとるうれとん。古人の金言善悪の報らる事。壁言響の物小應ぞ  
るふひと。蓋君子の人とりの鏡とん。前車の覆と見て後車の戒と。遠き  
慮つるとたへ必だ近き患み。あく小著を物がらう全部六冊の義夫烈  
婦の復讐をけ掲焉と述因果觀面の道理彼浮屠氏の説根きを命て  
大師河原撫子譚とのふそのあり

第十七 白鼠忠義ものがごと

つと太夫が正本ふ。歴然と一著明きさても坂田の金びつら。顔の色  
ある赤本の時代よ世話と撮合せ彼箱根う先とり。野暮る趣向の化  
物語へむりふ異なる戯作者魂膽智恵に僅ふ三文う。稍一條小綴り  
たる。九六の百鬼夜行より。人ぞとあらたものへなりと。人のいひらん人心心の

鬼をそけまふ繪師ふ寫させ詞よ述て。嗚呼がましくも戒の端ともあまね。  
轉ぬ前の杖もさりてうと竹の世渡屋長者が故事と磨きまかせとごよ  
の燈燭夜の錦の秋をらぶ。丁子頭も実と結ぶ空をぬる。一の花の春あくふ  
壽き序まるといふ

第十八 殺生石後日怪談

石と鞭く羊とるませ。道士の杖狐と射る石と奈須野の勇士の鏃其の唐山  
の列仙傳山海經よ封神演義をい。天朝の下学集。實事攷虚説攷むら  
り。あくふ傳へく三國妖狐の。とありふる怪談と種ふ後日の殺生石竹を  
の撫子の主従と。あま又と削る女武者かぬ操の常夏と。名ろかそれをも  
諷詠の。あろへむら。花あり実ある。彼鎌倉の大臣の。その。ぬの。矢なみ

ほくろふ眩當けう人又霰ぬむらう那須の篠原と詠きたる名歌ふ携る  
狂詩の漫吟炮烙の狐色ある米のうふ霰まらむ豆は塩打と戯れて  
春雨の徒然とまぐさ草紙とまるとのたうらう

第十九 同續篇

戯作者さうり羨しうらぬそ結いりらト。人ふ巢立のうをほけた飲らちまめ  
鳥欣とわりのるよ。群雀の惜々たる奚ぞやの中ふ雛鸞の遊ぶと知らん。  
結句の蠢々ふる争う合壁ふ潜龍のらる狐思へん。接輿の歌りばも實と  
擔ひ一老夫のそ。伯鸞の五噫誰う杵臼の下ふ一を微めん。あまふ由て  
あま紙観まべ。紙屑籠ふも方金らう。芥溜の隅ふも鼈甲の折るたよらうば。  
そ結隠まらうと顯しうらやと行ふものと小説といひ。又草子物語といふ。

聖人のせざるどころ。狂簡子の耽る所作家の祖師と原ぬれば。莊氏の寓言釋  
氏の方便突う出さうそ鳥の百轉も知る人を知る。是も勸善懲惡なんど。手前  
勝手な非ふ理とつひ。筆ふ無益の殺生石。後日怪談第二編。あまふみ本  
と合巻の冊子の合の狂言綺語届ぬ智慧ふ継足して。書肆の譴と塞ぐ耳

第二十 同續篇

怪力乱神聖ハ語らむ。妖怪變化奇異の事。必むありといをまくまれを。  
今眼前に見るふより。必まるといをまくまれを。阮籍が悔といふへん。  
幽冥の物出沒非常是聖人のいせざる。所以衆人へ奇好むのみ。僉  
怪談を聞まく欲して怪物と見る事。も憎めらるる惑之。國家真らん  
とまるとは。必先禎祥らう。國家亡びんとまるとは。必先妖孽らう。

禎祥妖孽非常の物。禍福吉凶前より以て天誠と垂ると知らば。徳と脩  
めて穰ふふまらば。おの餘へ多く狐狸の所為亦怪むふ足るものあり  
ぞ。設夫浮世と觀ざれば。天變地妖の氣候の不順變化の天地の運行よ  
て。物も化ざるといふとあり。そをいひふぞと推てを見よ。春の毛虫と  
蝴蝶と化け。冬の腐草の螢と化る。鷹鳩と化け。田鼠の鶉雀の蛤。海蛇の  
章魚枚挙るふ違ふは。是らその屑もをりぞ。媳婦化けざれば。姑  
みく。女婿高老と歴て舅とある。残忍不仁の心の悪鬼怒罵悪言の  
夜叉人と見ざれば。巨天窓の俄頃富漢の化ふるあり。額角角ある十  
羅刹の焼餅家々の化ふる。疝毒入たる獨眼入道塚々見越ま。輓轡  
頸酒肆の脊門ある得利兒。八百屋へかよふ豆腐小僧。いづとく化物ありぞ

りる。それ怪談と肯とせし。後日るづの殺生石。玉面九尾の事ありふ  
たる。奈須野のちほ稿もま。初編二編と綴りあり。ちや六七年打捨  
て。夜明の幽霊見るごとく。立消ある筋あり。巴後の趣向と忘れ水。だく  
急み三編の催促日々。逼詰る。穴も入られぬ狸毛の禿筆。とやらかう  
やら書ついで。書肆の責と塞ども。透間の多き一々。稟。ちやいと山と山  
口。画工も。馴洙の一筆齋。歳々年々。咲ふは。花の大江戸の名物と。  
ホホ敬て序あると。恚あり

第三回 同續篇

君子へ遊て泥ま。細人と遊て帰らば。遨遊かのかく。ちや差あり。西方聖人  
の方便。遊び。漆園老爺の寓言。遊び。晋地の杜預。春秋左氏傳。我

邦の圓珠の萬葉代匠羅漢紫式部の野史物の本智識真人風流才子の遊ぶ所異あれども。真俗深意通用して。その趣を竭さぬのみ。かくて今吾遊ぶ所亦是遊戯三昧にて。遊戯のうち真如あり。真如の隠れて他行と推へば人這真と知るもの早あり。それ知るとあつざると五篇のぞ眷念せん。這書も既三卷えまつつて。吹煙休暇の程もまゝ。四篇の催促逼迫ても。御邊足下の切口状めて。手がく延て逃もせぬ。獨苦と獨樂む。苦樂へ浮世の境界ある哉。現着官のたのみへ。吾苦中より出る所。苦中み樂あり。樂中み苦あり。嗚呼苦也樂也。有漏あり。苦樂ふらるる。忘る後よ。とめて真如の真み入る。

第二十二 同續篇

著述よ宜し。つゞる時分多くあり。大風大雨雷鳴の日。家内の小恙。口舌おしよべ。比屋の三絃吹播醉狂小兒の發憤來客の長尻。皆是作者の禁物あり。又只あまらのみもゆるび。三伏の暑き頃。具牛の月。喘が如き。六月の筆も把られぬ。障子紙門と開るる。端居と一ツ。瓢形の天と瞻りて。消き日へ。心神洩して。きも鍾らぶ。かゝる折ふる一行でも。文と綴る。小懶きものあり。又玄冬の寒き日へ。視氷り指龜りて。彼宋人の不龜手此藥と。欲しとかりぬ。馬鹿も用る。茶とそりふ。つる。とあひまを。氷涕落て料紙と濡し。夜並よ油を費せども。龜屈ふよろ。果敢どらぶ。かれば二三四五の月。又八九十の間。てりて。著述の時と定む。まども。花咲らる。心浮て。壘籠居る。小倦日もあり。四月五月へ。徐々と。蚊ふ責ら。と。夜延らるる。

あれと除けば年中不寫く日へ寡く。休む時多う。その故ふらそ年々歳々。書肆の青を塞がらねて。いふに己んと思へども。己まをせむ。休られぬ。曰く。のりといふへせん。去歲ハ秋暑も殊更。後の月見の比よりぞ。猛可仕入の殺生節。季晩發取承知で五編の急稿。春の初の間合せん。と。夜と日ふ絶で廿日。のりまふ。綴りまのせし。

第二十三 傾城水滸傳

源氏物語とよまふ。漫源語とよまふ。漢土の俗語ハ解せぬ。猶水滸傳と剽竊。その少くも。何とあれば。その二書や。考抄通俗あれ。彼と。釋解多きふらう。然れども水滸の如き。一。百回のみ。く。皆悉く取ものあけ。可憐趣向と婦幼の觀物。

よせぬ。遺憾さ。今裁小此書と編り。さうさう。毛唐人の陳奮漢語ハ摸擬。要あり。因て天罡地煞星。一百八の草賊。賢妻烈女。綴り易へ。傾城水滸傳と命より。濫觴。室津海。遊女長。事。且。掠稿の龜鶴。高俵。似れを。かくて華洛の綾校。王。進。擬。又。浮潛龍衣手。九紋龍史進。擬。此。他。越。路。今。半。額。戸。隱。の。女。鬼。等。陳。達。楊。春。似。た。る。へ。く。又。虎。尾。の。櫻。戸。の。林。沖。は。相。似。た。る。花。殼。の。阿。達。尼。魯。智。深。は。相。似。た。る。折。龍。の。節。柴。ハ。茶。進。た。ら。ひ。ある。枚。拳。小。違。ら。う。此。冊。子。の。初。編。の。み。是。よ。の。後。春。毎。毫。と。接。條。の。櫻。木。は。鑄。出。ま。き。ん。ふ。ん。

第二十四 同續





ゆらと予も又此の意なり。且百八の強人と總て烈女小綴り易し亦勸懲の一端なり。那時鎌倉の政子なり。京師より龜菊なり。女主と内奏より事起りて。終に承久の乱に至る。されば此時小方て義婦烈女の薄命なる故。水滸の一書小模擬するものなり。婦人ありての恰好まじく。所ざらるの多うらと。とやうかうやうらみ附て。又續出を第三編の自注と自叙に代ると如此あり

第二十六 同續篇

或予は問て曰傾城水滸傳の何の爲りて作る。予はと答て曰。爲生活より作るの之。夫儒佛巫醫百技の徒渡世の爲にまるものなり。陋拙杜撰も咎らふ足らざる況稗官无根の談雜劇の脚色小等まのみにあつたれども

作者の用心聊亦見らるべきものなり。彼清の逸田叟が女仙外史の一書と見ぞや。燕玉の反逆と心誅せんと欲する爲に。閨軍女兵と鑽出して。妖婦唐賽兒と勤王の小説一部とをさる。彼は則妖婦とての正法とし。燕軍とて外道とす。迺あれと水滸傳なる。草賊とて忠義とし。搢紳とて大賊としたるより。小比とす。を其勸懲に延遷あり。あはよるにあれと觀し。亦此傾城水滸の冊子也。作者の用心知るべきの事と好て思はざるもの。評まなきと評せざりて。私論臆談烏夜の銃炮も似たる批評もなり。とぞ。毀譽褒貶の争ひの起る所。吾只避て通さんとする。成らざるに譏れと古人ものひらる。彼物論と齊う得せざる。鵬と斥鷃の類は墮べし

第二十七 同續篇

著述の勞は看官かしのむ。譬を田翁苦辛の粒米。鯨一はりて離狗の  
五器へ投して省ざるが如し。嗚呼書作るに難くもあらず。いふとの  
名人才子も漫み剽竊模擬するもの。皆等類と免まふ。只よく奪胎  
換骨の手段へ造化の巧を欺く。接木の花は異あらば。彼挑りて櫻と  
開せ。積みて丹楓と染さる。看官はその臺と忘れたるのみあらず。一  
て。樹も亦已だ根本の他木あると知るより。あらず。花を呈し実を献む。  
らね。奪胎換骨の妙巧といひあらず。かまへ。傾城水滸の一書も。  
亦その手段接木と等しく。羅氏の水滸を基ふいて。作者の趣向と接合  
し。兎園冊子小盆を裁て。書齋の室に養ひ立てる。是ぞ五編の花の魁  
縁日ものと同様よ。安がうれて。骨折の甲斐あるといひ。仙鶴堂が氣と

春袋の上本より。何處へも融る。吭包も。多評判と。うらぐ啼く。東小  
久し。作者の常盤木。今茲で三十八ヶ年。休まを續く。筆真加。商賣真利ハ  
板元の耳たぶく。溢る。迄よ。愛敬られと。壽て序ま

第二十八 同續篇

余曾かの。水滸傳ふ載る所。張青孫二娘等。十字坡に旅客を屠りて。も  
て肉包と嚙ぐの。一回。その。枝害殘忍あ。み。ち。極。便。是。異。邦。の。衰  
世。兎。賊。よ。つ。た。き。所。尤。讀。み。忍。び。ざる。もの。之。且。又。武。松。が。鴛。鴦。樓。よ。張  
都。監。蔣。門。神。等。と。鑿。よ。あ。ま。さ。が。如。き。その。殺。戮。數。十。人。僕。隸。婢。妾。と。り。み  
とり。と。も。一。人。と。り。て。免。ま。ふ。只。是。人。を。殺。し。火。を。放。て。愉快。と。ま。る。の。の。  
情。態。と。寫。さ。る。の。の。ま。且。義。勇。と。ま。さ。る。の。の。開。威。天。朝。へ。人。の。氣。質。の。

萬邦小捷きたるとりをきく。就中曾我胞兄弟が富士の狩屋よま  
 だま入りて。父の讐と撃つが若き當時宿直の勇臣等の防戦するのふ  
 當りて。是と斫ることをて十名。然とも僕隸婦女子と屠殺し。又と  
 汚さんことを欲せ。あの故み時致へ五郎丸は生拘られ。是の智勇  
 の足らざるより。蓋五郎丸が少女子の打扮して。よく欺し。ふりつ  
 る。此時尚武松と。時致は代ら。五郎丸も亦免る。これ紙  
 得ざる。又水滸傳なる武松が蜈蚣嶺を過ると。道士師弟を殺  
 せ。とかのふ。新は得る戒刀は擧りて。祭らんと欲するのみ。いまだ  
 彼師とそれ徒弟の悪人あると。何ぞ殺す。この速る。わ  
 む。筑紫の御曹子。吾千軍萬馬の窮阨の中。よあ

里とりども。當の敵は。いまだ。當て。射ま。勇士の  
 本意と。當は。かくの如く。今その忠孝義勇と。水  
 滸一百八の草賊等。比競。夜光燕石相似て非る。  
 此。抑余が戲は。著せるあの冊子。水滸傳  
 ある脚色と撮合して作るもの。か。理義は違へる所。綴り易く  
 是と取らむ。用意豈。是のみ。や。毎回必。其の意味。具眼  
 の人のつ。知るべし。

第二十九 千代緒良著聞集

著聞と名づけたる書三本あり。古今著聞集二十卷。橘成季ぬりの作  
 り。又新著聞集十八卷。寛永二年の春出たり。又近世江門著聞集十一卷



の手管扱商賈の空誓文。つらまゝ虚誕なつらざりたる。虚は是実の對<sup>る</sup>にして花ハ虚あり。実をまこと邪説暴行なたるものと善巧といひ。戲謔と言ふ。神道眞實佛語の啗々。神釈西部の乗合あり。金毘羅船と題する。標識を讃州象頭山鼻の先ある智惠の海面花取楫任せると。作者が獲手は帆と揚て思ひはくゑと女符筆は漕まゝ今昔和漢は渉るも少許類拔彼天潢の何候王の西遊記より故事附てやうやく物は草稿の。かゝ代のむう佛在世のつらまゝの事なり良は綴りたる戲作も勸懲眞実なつら出さ虚おやとへ。神も照覽佛を見とへし。身まは世まはたとかゆると。かうり羽織の裏とく。鶴の脛る長物語の今茲初編の序ぶらう。追く接木の花の春。幾編續く飲其処まへの考果一あたそのうら。千世は八千代と

かへ向も。うらとみかへ敬て序ま

第三十 同續篇

むう浅井氏の御伽婢子の前燈新話と綴りうら。聊も唐臭きこととまどく。本書とまどくぬ看官の論あり。和漢の裨史と好るもの。是と作者の働きたる。此草紙も亦似たることあり。趣向ハ西遊記は縁るといへども。彼小説と同トらうらぬ。著述の苦心と誰う知らん。も一豆小眼のて観るとたい。是只兒戲の冊子の。千早振神。言左弊俱佛と弄ぶとやいふべくらん。又う有漏と見透まそのの狂ひるうらも成佛をとり入踊念佛の類ひとやせん。そのうこれかともやと乗かつら。今更よ。ひくみゆこれぬ金毘羅ぶね。ま初編うら讀久して。二編三編幾編とま。漕

著る迄御覽ども。終よの到る彼岸の浅井は類せる趣向をも人手ハ借  
らぬ硯の海は深い意のゆく波よけの港泊の日和癖。作者も癖おやが  
のつづりも。なうや又年々精と出まへし

第三十二 同續篇

天朝いみじうり渡天の僧ふし。まうも近世渡天の作らう。むりりく  
三河の前司大江定基祝髮入道して。法名を寂昭とりし。且その道徳碩  
学のゆかり。天台座主は補せらる。三千の僧録さう。余後宋の天台山を  
眼前見まくりとん。渡海して彼土に至り。然るに能樂石橋の一曲み  
又云云と綴り易く。天竺清凉山に登りし事とん。今這冊子は著したる淨  
藏法師の渡天のことも。石橋曲の類と見るべし。嘻華胥南柯無替の事理



外の境ひよ遊びて夢の浮橋桁と敷へて。事迹の有無と論ぶるりの柱よ  
膠むるふ似たり。將唐山の小説と。皇國の事み作り更らふ。彼と此と  
物とね異あり。されば本書みかろまれて。作意は自由と得難きを辛く  
綴りたる。作者の苦心に十分あるも。看官に二分三分あるんと。なうく時  
好まらせんし。功をたごまへ。鏤して利あらん書肆の  
ためし。亦いとてそのこととりのみ

第三十三 同續篇

世は萬物の生出るも。愚あるらう賢しきある。清らう濁ありぞ中不  
天地と父母と和合し。いと清しきも浄しうらう。正気と稟く生る  
ののち。その五臓も。清浄し。五臓の清く浄るりのい。睿明ありて

命長く。生とぬぐふしを知り。死しに亡びぬ。便是と神と稱へ佛と唱へ聖人といひ。又その臣と賢者といふあり。余らば淨藏は一人の名よ。わらむ。神佛聖賢ありたるを。皆淨藏といひしむのみ。あつたれども賢愚清濁是同根佛も邪魔も一体真如。彼百怪の虚名あり。正覚もよ。本来空迷ひなれば悟りもよ。無佛世界は外道なり。かきしをいへ。ても知しとく。邁て無何有の郷人は問ふべし。

第三十四 同續篇

六の書の初見したる日の神伽毘羅坊を征し難たし。遂に釈迦如來の手を借て。兩界山ある五行峯に謫罰せしめあり。是則西遊記に天帝孫悟空を征しつゝて。云云の事の如し。そを只文に就て見れば。

神徳還る佛力に及ぶるものみ似たり作者の本意豈然らんや。夫日の神の至仁大徳前對るく後敵あり。あの故に三つ伽毘羅を征しあり。釈尊ありを征する時の君臣佐使の義分明之。かくて又釈迦如來も。三つ伽毘羅と濟度せし。觀音大士に度せし。淨藏渡天の資と。も。な。り。あ。ん。段。み。至。り。て。獨。觀。音。の。妙。智。力。釈。尊。も。も。優。と。る。が。如。し。豈然らんや。あ。ん。や。君。臣。佐。使。の。功。一。あり。然。り。と。い。へ。ど。も。君。位。に。在。る。の。の。と。さ。く。そ。の。功。徳。と。統。ぶ。あ。ん。大。仁。に。な。れ。如。く。大。徳。を。徳。と。死。よ。似。たり。看。官。悟。ら。ん。甲。乙。の。り。と。か。の。よ。て。難。び。る。の。惑。ひ。の。も。本。編。書。肆。ふ。故。り。て。去。歲。に。製。本。延。引。せ。り。今。茲。に。六。編。の。ろ。と。も。ふ。賣。出。ま。し。り。の。板。り。は。好。し。半。頁。綴。り。易。て。序。を。



第三十五 同續篇

明の謝肇淛古今の稗史と評論して西遊記とて第一とす。初彼意匠  
とあせしその書へ既ふ五車不富て。且易学説相佛經道書の諸宗旨を看  
破り才へ宛も二酉不過て。將司馬斑史と屑とせば實ふ小説家の巨擘不  
して先は敵なく后は對るし。あつてりて士君子の為みも選棄られむ。水  
滸と共に並馳て今不至る盛ん然とも水滸傳はよく人情を穿鑿して寫  
して人の性の善惡を尽したり。又西遊記は百怪千妖變化の不測と音とて  
彼情態と寫まると早之故を以て世の評は水滸は不及とあるものなり。是  
等の人の西遊記をよく視るものとて予も亦謝氏は同意して  
彼書不困て此書を著し。淨藏渡天の无根草と種藝るよしよくふ年十つ。

大凡此の如き冊子ハ看官譏易くして作者は做匠き所なり。其といふ  
ごと推されむ。初編ハ神代の邈然たる婦幼は落と取り易くうづば。扱又第  
四の編よりして。異邦の人物ありざれを。皆是魔王妖邪の類之。次の巻ハ  
とちけを暮ても和尚と怪僧のふり。愛敬色気のなりたるの多き。生  
閨秀兒童ハ今さらよ生人と見るが如くあり。又西遊記は熟せる人ハ  
珍らげなるといふ。とやらん。かやあらんうと。案トたるより産  
ふ易く。傾城水滸と共俱ふ。世の評判をまんざらなからず。第六編まで漕つ  
けたる。金毘羅船の利生を觀面。凡て攻攻に運慶春日の作の古物  
より。此新作と甘泉堂の好む小任して本編より。毎編八頁四十頁と上  
套下套と二帙より。上本製の物柄宜く。外題とらるや春袋入り。到

底ハ竹馬の友網兒戲の冊子は物一げなる。序文も輸て壹丁ふ述ぶ

第三十六 同續篇

邈姑岑々うう是首うい。昔よりいふなりといふ野夫さきく化物とも策  
子で觀まる江戸の朝傍彼漢文の蒼表子と大和錦繪の摺付表子は綴  
易るの時好流行新奇も昔の相場も。高きふ登るは低きより毛。下  
学上達の資あり。あるべきものより孫ども。看るへ看ざるは優よりあ  
れを童蒙這書と繕きて。綱曳石投木登の惡遊戯は易よとあり。抑あ  
る見たる石折へシテありて。淨藏へ即ワキあり。且ハ戒の悟了たる。悟て  
又了るもの。沙和尚の悟定たる。悟より定あり。皆是人の心より。定  
へ禪。禪も靜靜あるハ天の性。動きて變化する時ハ無邊無量の邪魔と

ある。變化既極と。魔も又成佛する時あり。誰うそ心の上。一箇の阿  
弥陀かうらんや。觀世音も釈迦如來も。亦是人我心の本来他と求めむ  
て這身より。觀する時と世音通也。機感圓通自在ありて。響の物は應に  
る如きと。名つけく觀世音といふ。心の常と如來と。心常なく禪定あり  
と。終了悟の時を得。伽毘羅の名義ハ這策子の第一第二の編  
中に見えらる。夫金石の堅固かるも。火とめてあき紙攻れば。折もあつて。一  
碎るも易う。かれば亦石折は修行鍛煉の別義あり。又淨藏の淨臍た  
る。前ふもいふるごとく。是心頭の如來より。迷悟の判る所あり。迷と  
悟と賢不肖といふ。我五臟の淨うると。淨うるといふゆらんのみ。迷ふ  
ものも迷ひ紙知らざる。悟るものハ悟と覺を。迷悟両るは忘れて。そ

トめて維摩の室に入る人

第三十七 同續篇

西遊の一書。幻縁不可思議原何人の作あるとあらば陳元之の序に  
 何侯王の作とのひ。又尤侗もあれは序にて丘長春の作とのひ。並にい  
 まるの否とあらば。元史の止機傳ふ處にて神仙と稱まとのひ。尤侗が  
 序は此義と論トて。言皆華嚴經中より取りのて来つといふものへよく其  
 隱微を發明して。その骨髓を得たるふちのたも。悟一子陳氏が評微り  
 せば。疇り作者を三教の忠臣とも知りしや。看官悟りて讀るに  
 稀も。僉惟談の巨擘とす。相看て噴飯に充るのみ。かくて吾此策子と  
 綴るふ。とて彼書と剽竊摸擬して。皇國の故事ふ縁るものなり。亦

画虎類狗の譬に似されど。婦幼は論一易うると旨とんが。成繙その思惟よ。今  
 本編は説くごころ。道士全真妖術のり。烏鷄王とあると三年。后妃も太  
 子も群臣も咸相仕へて疑はむ。それ假と真と。知らざりたるに迷ひの  
 玉石一とび認錯てよう。夫婦枕席と俱ふせむ。母子亦胡越とあるに至り。こ  
 なるは毫たごりも疑ざりたる。凡慮肉眼は然もあらん。彼彌山の魔王の如  
 き。天眼通と得たるもの。あつても父と認らざり。假とりて真とす。  
 看破るごころの遅まき何ぞや。只是のみよりせめて。又孫行者の岩拆ま  
 ら。その師の真偽と認め辨るや。咒文よりて知るとは。神通不測のも  
 のとのひとも。做とらむは必迷ふ。その求るとは。故に皎々たる真如の月  
 と。心よ失ざるものなり。一切衆生邪魔外道よく這境界と解脱せを。初て

佛子といふまゝの。嗚呼西遊の一書意味深長字々金玉と和解たる。原  
本越よ四十二回本集やうやく第ハ篇小も折々出る観音びくき扉小半  
下取入とたる。序も心切て作者の本心生地露して述る事佳なり

第三十八 書名知れぬ

作者の丹田稗史の種らう。蒔バ看官めといふ。言葉は花と咲せくも。  
實のたる趣向ハ得易くくむ。果敢多の業も三十年。勞して功もあは玉る。  
今茲の世界と宵勘定よ積りー雪のふること。謠曲よ本づく常世が勲  
績佐野の船橋纜よ綴りかーワ又さくふ。断離たりとも兎毛の筆と瘦  
さうとも左手よらう。錆薙刀よらう。孫ども。ゆぐみー墨と摺減ら。時代  
と世話と木よ竹と接りいなる彼の鉢の水。加賀よ梅田ハ草紙の魁又

上野よ松ガ繪師かく故事附て越中よ。櫻木小鶴め。合せて三冊又三冊。  
相違らうざる自筆の序。行燈よ寄添ひ漫不述ぶ

第三十九 書名知れぬ

福壽海より出現して無量感應の利益と施。金龍山よ光と発ちて。慈眼  
視衆生の誓尊。浅草寺のむらう。三社の縁起と種として。實うう出と賽  
方便。亦六冊よらう。船でも。あう物とも及びた。筆よ写して姿見の。  
姥ガ池よういと浅き。凡夫の智慧の矢隨身門前編後編ゆらぬ。春の駒  
趣向ハ二筋よ屋の石枕も動きたる。千代の始よ先いさむ。春の駒  
形繋ぎ留。注進の内田ガ銘酒と同名。宮戸川よ題をれとも。都鳥よ  
仙禽鶴屋ガ懇辞さるよりふく。壁よ馬道乗りけ。一夜づけなう急案

まぐろ。世間あみ木の時代世話十社の草芥鎌倉管領扇ヶ谷あき末廣  
巷路山の駄々咲初々。白ふ千本の花川戸。そは櫻木又刺本の吉例変ら  
び戯れ述ぶ

第四十 赤本事始

昔ハ赤本只画と宗と然るも作者ハ丈阿らう。画作ハ富川吟雪らう。明  
和安永の間ハ至テ喜三三春町の両方子。そト多ク滑稽と唱へよう。今  
ハ至テ四五十年。流行既ハ推移リテ。猶且時好ハ従ふもの。新ハ走り奇  
と角ふて。大根の切口ぬとりの根と来と。鯛の味噌酢で。四方の赤子供衆  
合點致く。の古風と物の屑とをせ。越ハ古昔と原れを。月ハ兎の手柄  
らう。花ハ花咲翁媪らう。離黍の狗の恩報トハ。雀の宿と何處と問ひ

しも。皆是勸善懲惡の捷徑とて誨へたる。童蒙話と趣向よりて綴るも  
己ガ猿智恵と蟹味噌揚ぬ猿蟹合戦。舊節と温て新粉と知る。臼杵迄を  
漏さず。取合まれを。是も亦。梅ハ鶯。楓ハ鹿。黒縹子の帯むうらう。捨らぬ  
ものハ今もわも。飽ぬなぐりの江戸の花摺付表紙の紅澤山。赤本事始  
と命。物部あうね板元の森屋ガ需ハ應ある而已

第四十一 漢楚賽擬選軍談

智者ハ自適して流行の先達たり。庸才ハ自適せぬ。人の遊ハ所ハ遊びて。  
常ハ流行と追ふもの。果敢たぬ冊子物語も。時好ハ慍へハ行れ。慍ぢれ  
ハ行と。書林永壽堂あう。見ろよう。やありらん。傾城水滸ハ伯仲を。新  
著もがると予ハ請へり。さされ唐山の稗史ハ。西遊水滸の二書の外ハ。又

翻案をんきものなり。よく漢楚の闘戦と頼朝義仲両雄の確執と綴  
易く。この物の本を作らう。抑清盛の秦始皇に似たる。頼政の陳渉に  
似たる。頼朝の漢の高祖に似たる。政子の呂后に似たる。時政義時の諸呂  
に似たる。牧方の呂須に似たる。義經の韓信に似たる。前輩聊評論  
らる。讀書者の話柄にまゝなり。只是のみより。義仲の項羽に似  
たる。覚明の范增に似たる。巴の季布に似たる。兼光の鍾離昧に似たる。伊  
東祐親入道の田横に似たる。廣元善信の蕭何曹參と相似たる。成敗異同  
ありと。亦その趣をたみも。帝頼朝の臣時政の壻。樊噲の  
如きものなく。功成名遂て身退たる張子房の如きものなく。智辨敵と欺く  
不足る。酈食其陸賈の如きものなく。諸呂と誅して漢室を全くせし。陳平周

勃のどたものあり。それ無きもの。些許似たり。たと撮合して。二人あると二人  
の事と。譬ば下邳の圯橋の張良。牛若あり。孫不可あり。如し。蓋漢楚の  
興亡の史記漢書の正史ら。依演義も亦綴りたり。なと又譯せし通俗の漢  
楚軍談まらうと。婦幼へなほ見まく欲せむ。讀とつとと解し易く。ぬ。異  
邦の軍記なれ。夫江南の橋の江北に裁られ。積とある。その便ち是  
風土の妙あり。か。漢楚演義の一書也。予が架上に措きたる。變ト  
本邦の軍記とならう。又是風土よるもの。實の時好に推當たる作者の  
手津間とあり。孫々

第四二 同續篇

和漢將相の行状得失相似するもの。往々あるなり。木曾義仲の楚の項羽に似

り。さむし義仲の勇悍膂力項羽不及ぶ。忠信器量ハ項羽ハ優る。何となれば。義仲粟津の敗軍不疲勞て奮勇の氣力多く。被たる薄鉄の鎧も。目属の似む重しとつり。項羽ハ垓下の敗軍。漢の十將軍と殺麾けり。人ふた境入るが如し。只そ結虞氏と相訣る。愛惜悲歌の趣ハ義仲京師と退くとた。松殿の殿下の姫りと。別とを惜るふ相似たり。是より先ハ義仲の北陸七ヶ國と畧せし時。賴朝そ功を忌て。既ハ確執ハ及んとてける。義仲あんと争はむ。且つらく平家の大敵ハまぶさむ。おろと今仇寇と討むて。親族と戦ひ。志はなげく。その子清水の冠者と質とつ。加旃む。諸源の起ハ高倉宮の令旨よ。と。義仲あんと思ふて。その御子信濃宮と主とて。皇位ハ即奉らん

と欲せし。上皇許ハあはれ。義仲とく憤恨。遂ハ不臣の罪を得たり。又項羽ハ吝て功臣ハ與へず。約ハ背きて。劉邦を蜀漢ハ藩ハ就し。義帝と立て主と。終ハ是と弒たり。是よりて觀る時ハ。義仲ハ勇悍膂力楚の項羽ハ及びざり。項羽ハ忠信義仲ハ劣れり。又あもふ。賴朝ハ武略洪運粗漢の高祖ハ似たり。然れども。寬仁大度ハ漢高祖ハ及ぶ。漢高ハよく陳涉ハ屠と立て。秦と亡む。秦の嚆矢たるその功と賞し。たり。余ハ賴朝ハ賴政の子孫ハ恩敦う。賴政ハ是賴朝と同宗。よ。漢高と陳涉の類ハ。妬忌餘り。賞罰正し。ざる。知る。且漢の高祖ハ劉氏ハ。王とせむ。その兄の子と初て。親族と。大國ハ封たり。賴朝ハ則然ら。叔父と滅し。弟と

殺を罰重くして賞鮮し。譬彼章魚の足を啖ふく腹ふ充るを快しと思ふが如し。足竭るとたの身も亦斃る。悲いなる義論かくの如くなれども。あくうの漢楚の趣きふ倣ふく。勘定と合まるの。そと好とまる永壽堂。又あの二編と鑄んとく。請求ると急まま。聊あれらの言紙叙て。虚實の界と明まて恣あり

第四十三 同續篇

稗史の荒唐風と追ひ影と捕へ泡を爪と尻と握る。報よよつと臭名の。世ふ流るゝい素より論み。然まども作者の用心。亦見るべきまのたれよ。のらうど。便はその學術。浅深あり黑白あり。譬古人の名は嫁して。一部の小説。一種曲の傳奇。院本と作出まふ。善人と誣て悪人とせむ。又奸

賊と忠義士とせむ。あまんと作者の用心と。そは善人と誣て。のら奸黨と倣せし。そのい手習鑑の希世是あり。又奸賊と作り更て。忠臣義士とせし。そのい水滸傳ある宋公明阿波の鳴門の十郎兵衛。白石齋の常悦是あり。そが中ふ。小悪を新ふく。良善と倣ま。猶可也。善人ありしと作り更て。悪人と倣ま。そのも。非如その文佳妙と。のふとも。吾甘せざる所あり。抑這漢楚賽の響ふ一二の編輯より。義仲と。の項羽は擬し。かくて演義の趣は倣ひ。編りてゆく。彼項羽が江の中は義帝を弑する段。至りて。毫と含く。以謂く。木曾が信濃宮を立し。項羽が義帝を立けり。似たり。ま。うらふ義仲の初と推義。は仗て。宮と帝位。は即ま。うらんとおもひ。あまの久し。うら。と。上皇を。議。は従ひ。あ。の。且。佞臣知康等。群



小愈せうこ其功そのこうと媚そとと。讒言ざんげん市虎いちこと云いふ。義仲よしかたのこゝろ憤激ふんげきして遂ついに悖逆びやくの罪つみと得えたり。さうと漢楚かんその趣おもむりて。義仲よしかた官くわんを弒しすと作つくらば。是こゝろのこゝろ忠義ちゅうぎと誣いは。虎狼ころう野心やんしんと做おままのこゝろ。因よて江中えちゅうのこゝろ一條いちじょうの項こう羽は子こ嬰えいと誅ちゆうしたる。その事ことのこゝろ撮合さつあひして。彼弒逆しやくぎやくの事ことを取とらば。用心うしん帝みかど是こゝろのみこゝろ。局きよくふこゝろ。益えきて彼書かきのこゝろ隨まひ。綴つづり做おうこゝろ。がこゝろ。多おほくあり。のこゝろ童蒙どうもう何なにとこゝろ。知らん。のこゝろ腐くさるこゝろ。管くだとこゝろ。天あまとこゝろ。關せきふこゝろ。小家せうかのこゝろ珍めづしこゝろ。説せつのこゝろ。ままけけれを賣うるこゝろ。書肆しよせいのこゝろ。責せきのこゝろ。塞さいげども。切張きりぢやうのこゝろ。せせぬこゝろ。障子じやうしのこゝろ。引幕ひんまく第三編だいさんぺんのこゝろ。序じゆぢぢうぢたた。地鉄ぢてつとこゝろ。著あるこゝろ。一ひと片ぺん心しん。磋さてこゝろ。わわくこゝろ。ハ間まハああのこゝろ。隙ひまのこゝろ。駒こまのこゝろ。後あとれこゝろ。今いま茲こゝろも筆ふでと走はらこゝろ。足あしより達者たつしやのこゝろ。拳こぶしのこゝろ。一得いつとくのこゝろ。不ふ幾いくのこゝろ。春はる毎まいも長物語ながものがたりと續つづ出いまこゝろ。

第四十四 同續篇

林間りんかんの紅葉こうしやうと燒やく。壘酒らいしゆのこゝろ。楚賽そさい和漢わかん割升わりしやうのこゝろ。辛から口くち甘あま口くち篩ふる雜まてこゝろ。綴つづるこゝろ。そのこゝろ。板いたえの株かぶと守まもるこゝろ。好このくこゝろ。通俗物つうしやくぶつのこゝろ。筋すぢなれどこゝろ。推おもこゝろ。ままままのこゝろ。潰つぶさこゝろ。ままぬこゝろ。世界せかい定めさだめのをこゝろ。トトめこゝろ。生なまこゝろ。ぬぬ趣おもむ向むかひこゝろ。筆ふで流ながるこゝろ。ははままうこゝろ。有あるこゝろ。白梅はくばい老人らうじん。粹すいハ昔むかしのこゝろ。餘波よなみのこゝろ。俟まちぬこゝろ。果報くわんぱうもこゝろ。夜飲よぢのこゝろ。仇癖あひせき。一ひと盞さん二ふた献けん三編さんぺんのこゝろ。下帙げしちをこゝろ。亭主ていしゆのこゝろ。ららづこゝろ。今いま茲こゝろへ遺いちこゝろ。遺いちこゝろ。巡めぐりこゝろ。盃さかづきふこゝろ。迹あと引ひ上ありこゝろ。長物語ながものがたりのこゝろ。そそのこゝろ。巴豆はとうでも紫圓むらさきゐんでもこゝろ。ささらこゝろ。ぬぬことこゝろ。緑返ろくへんをこゝろ。倭文やまとぶみのこゝろ。苧環おんわん針はり卷まきのこゝろ。十露盤じゆろばん顯あるこゝろ。で胸算用むねざんようとこゝろ。合あはせ鏡かがみや四斗樽しとうそんのこゝろ。筵包しんぱうのこゝろ。戲氣ぎぎのこゝろ。正銘せいめい永壽えいじゆがこゝろ。左ひだりリ利酒りしゆのこゝろ。跡あと催もよほすこゝろ。よよのこゝろ。帳ちやう。去歲きょさいのこゝろ。極月ごくげつのこゝろ。ハ高たかけこゝろ。後あとのこゝろ。四冊しふさふハ卯うのこゝろ。新板しんぱんのこゝろ。ととここゝろ。ととここゝろ。端書たんしよふこゝろ。本性ほんしやう錯さくぬこゝろ。白夫はくふのこゝろ。生醉なまざい孩兒こどもと敵手あいてのこゝろ。ままままのこゝろ。よよのこゝろ。機嫌きげんと述のぶこゝろ。

るものゝ物の本は作者

曲亭馬琴

第四十五 新編金瓶梅

金瓶梅一百回清の康熙辛亥。敬齋謝頤とよ序して鳳洲門人の作  
 とりひ。又鳳洲の手集とをとり。抑々彼書は演たるより。則宋の巨商  
 西門啓とりのもの。一期娼樂の話説して。その九友應伯爵等と王皇廟の  
 義と結べると開場とある。その時武松が景陽岡を。虎と搏する風聲  
 たり。併に王婆潘金蓮等が。武植(武太郎)と毒殺の両三回へ。則水滸と同  
 して。文と易たる処も有けり。畢竟水滸の西門啓と金蓮が奸通の毒惡の  
 段と父母とて。めて作り設けたる。但し武松が復讐の一條ハ。第八十七  
 回に在り。是より先は西門啓の胡製の房薬と過飲と。遂に其身と喪

ふこと。第七十七回なり。是武太郎と藥鳩せし惡報ことり。張竹坡が評  
 論ハ。金瑞が水滸傳の外書批評は。做らう。因て勸懲は傳會して。勉て作者  
 と資るものなり。彼書の宣娼導慾ある。君臣父子の間あり。讀べうらざる  
 のの多くなり。然るも唐山の書賈等。水滸西遊三國演義と金瓶瓶のて  
 四大奇書と云。顧ふも文の佳妙あると。猥褻時好は稱へばうん。予と  
 りて視之と云。そは趣向ハ国俗の浮世物真似とりものめたる。巧ま  
 る條理ハ一箇もなし。彼の乱朝惡俗の情態とよく寫せしのみ。彼書舶來  
 せしより以來。書名漸々此間も高う。あつて雅俗只そは書名と知れ  
 ども。得てよく是と讀その稀く見ふ彼書中より方言洒落のめり。さ  
 なくもなり。且通俗の譯文なり。彼の俗語と疎まりの。讀絲を知らぬ



者くと澤山さう小入まのいどを詐やるらる。這首の源語那首で水  
 辭和漢今昔技萃あまの犬の齒にあふ蚤より罨して入るあまのぬ  
 籍へ又只花見虱より多く背と祇店より。とをうらうらとて色も亦數  
 一の漏れぬ自恣荒唐果敢あは技ふ年長ても大象へ遊むぬ兎園の冊  
 子合卷その悲しき何書う小も席へ。情態景地やうのうて。寫  
 不足らぬ兒戲の本心弥敢ふ喘りても九尺店でも使まぬ。二間の鎗梅金  
 瓶梅高き書名と假初著せしより既まぢや。今茲ハ二編と接木の室  
 咲閑籠る間もゆづるを。だうく急案一夜豪根もあは言とあり貞  
 枝葉と麗て香よ匂ふ花の大江戸の名物といふもあまの策子の序じ  
 き草稿をせぬ筆ふ信しぬ

第四十七 同續篇

清の阮葵生が茶餘客話に云。狗と屠る者ハ狗これと吠牛と解くもの  
 ハ牛あまの觸ると。夫狗と牛とハ智慧をけれども自然ハ等類の怨と知  
 て或ハ吠或ハ觸る。物類相感天理に出づ。善惡應報類してあまの。あま  
 りて淨屠家の五戒ハ殺生とりて第一義とす。彼狗と屠り牛と解く者今  
 生して。狗吠ハ遭ハ牛觸ハ遇ふとらる。身後の應報あはしを得んや。  
 然ども善と行ふて福をた者なり。不善と做るも禍あはりのなり。是故  
 ハ世の人惑ふく動もまれば天と怨て。善惡應報ましと思ふハ。亦その  
 遅きと速きとつら。終ハ報ふと知らざる。然ハあまを書ふ云ハぢや  
 作善降之百祥。作不善降之百殃と。あま應報の速きとり人の

又易經云云と見ゆ。積善家必有餘慶。積不善家必有餘殃と。ある應報の遅き候りのみ。蓋善と做者のその身より延年福壽。兒孫より立身栄達。血脈との相續也。又不善と做者のその身より短命横死。子孫より凋落廢絶。他人代りて家に入ら。世ふ人の父祖たるもの。身の為め。兒孫の興を思ふ。懣て不善と做まら。らむ。善惡應報遲速なり。近きん必む其身より報ひ。遠きん必む兒孫より報ふ。歲月とりて論難。應報の理と知ましく思ふ。童蒙先這金瓶梅版を見るべし。

第四十八 同續篇

天道の善と與む。善は天理の公あり。人公と歡ぶ所以。天理の自然と

並ばあり。是より三尺の童子も。又八旬の公翁媪も。人の善惡邪正と見よ。彼ハ惡此ハ善と辨知ると公然と。然るを己の上より在りて。是非の境ハ惑ハぬる罕あり。其何ぞと尋ら。我死ハ決して臭うらむ。人の尻ハ最臭き如く。人の邪正を知る手際りて。己ハ愆非理惡と。善と思ふて諫と怒る。手前勝手の臆断の。迷ふと移らぬ愚夫愚婦と。佛ハ一切衆生と名づけ。世話やの。經文多し。佛の善巧方便。似る小説稗史と。言勸懲と宗と。つら中みも甚小く。淺むらう。版赤本とも。合巻物の本とも云。おも亦かみ。田地もあまれど。戲謔中にも用意あり。新版新編金瓶梅。今茲ハ既ハ六集の筆の肇。似げも。堅勁旁。いとかくま。述て作。板元の責と塞も久哉。嗚呼其哉吾

考らる。吾夢ふが秀稿と得ざるのうら。是と自序と云

第四十九 同續篇

夫忠恕よ一物と憐ら。辭謙ふして驕ら。是と稱て善人といふ。善人の徳行ハ必しも誌まらん。詩まらん則外あり。人よ善と勸ん為あり。又殘忍ふして慾と恣ふ。奸佞ふして人と害ふ。是と箴めく悪人といふ。悪人のまへ述るふ得堪む。其とも筆ふ載まる。一への人の悪と懲さんといふ。あり。其善と見し。惡と瘴ら。新編金瓶梅といふ。年々よ編む。歳々よ鑄ら。割刷氏の小刀子の塵積り。第七集も。八の巻ある糸口と。とくこアアふ。五萬歳と祝ふ新板物の本。作者へ古稀ふ。又四の緒の琵琶の湖それあり。硯の海の淺をうら。趣向と今茲も御覽ら。尚若いぞおざうませ

ぬつと。正辨空言扱まぜ。皆是腹の稿の話説と画よかく合巻よ自序を

第五十 同續篇

若夫人の賢不肖と。善惡邪正と。知ま欲さ。蠶と蜘蛛の行ひと見。是と思ふよ。蓋蠶ハ絲と吐き。蜘蛛も亦絲と吐く。其吐く所の物異ら。絲ども。蠶ハ絲よ作り。綿よ為り。縮ふ成る。綾羅錦綉の愛た。たもの物なけれ。製るよと得む。其人ふ益あるも。繭と為るふ及び。則其卵と遺せり。便是身と殺して仁と為る者よ。庶ら。又蜘蛛の行ふ所。其絲とりて網よ作り。小虫と係と啖ふのみ。然ハ大厦高樓の檐も。竹垣籬笆の垣あるも。久しく掃せざる。此が為よ汚されて。其本色と失へ。倘膳中ふ入ると。人と殺まの大毒なり。恁れば。の策子ふ見

一たる。武松琴柱ハ蠶蟲いんちゅうに似る。阿蓮啓あれん十八蜘蛛くもも如ざる。因果觀いんごく面の理ことわりハ這こハ集あハ日ひハああ。何なにと小兒輩こどもがてんうく

第五十一 同續篇

若夫花鳥風月の如きハ世の人是こゝと愛あざるハ一ひと。是こゝと愛あるハ各差あらる。詩歌うたの為ためハ愛ある者ものと風流士ふうりゅうしとを。飲食管絃おんじきの為ためハ愛ある者ものと疎人そじんとを。賣買うばい利りと射いる為ためハ愛ある者ものハ賈堅かたむねあり。开ひらグ中ちゆうハ花はなの風雨ふううの暴あと怕おそれ。鳥とりの桓山くわんざんの哀別あひだと慨あはれ。風かぜの萬籟ばんざいの噪なき。浪なみの厭いとふべく。月つきの浮雲うきぐもの障さや多おほく。浪なみ觀かんぶる者ものハ幽静悟道ゆうじやうぶだうの達者たつしやと。花鳥はなとりの為ためハ知己ちきと。一ひと。然しかレ果敢はつたるハ策子物語さくしと好あむ。亦また是こゝハ似にたる事ことなり。趣向しゆきやうも巧たくまし。一ひと。勸懲くんちやうの正たださと飲のぶ者ものと。真まことの看巧者かんかうしやと。又また巧拙かうちやくと勸懲くんちやうと。官くわんハ。只ただ

浮うたると飲のぶと勾欄下こうらんげの看官かんくわんと。又また唯画ただえと見て文ぶんと見みず。只ただ人ひとハ話はなせせ。其その概器がいぎと知しまく欲ほまい是こゝハ白髮はくはつの小兒せうにと。書肆しよせいの得意とくいと。ぬもある人ひと。抑おさハ這こ金瓶梅きんぺいばいも彼かの三等さんとうの看官かんくわんありん。左ひだりも右みぎも勝者かつしやの強つよきは團扇だんせんと抗あぎめやハ

第五十二 同續篇

物始ものはじめハ必終かならずしゆうあり。年としハ始はじめの門松かどまつハ冬ふゆハ終しゆうの煤掃竹すすきと涯はたと。櫻咲さくらさきく野のの花はな席せきハ紅葉こうじと。山やまの毛氈けしんと終しゆうと。酒さけハ礼れいハ始はじめりて乱みだり終しゆうり。色いろハ惑まよひハ始はじめりて別わかれ終しゆうる。稚子わらわこ毎まの竹馬たけうまハ老おいての後のちの杖つゑと終しゆうと。紅顔べにがほハ新婦しんぷハ雪ゆきの白髮はくはつの岳母おやういと終しゆうと。浮世うきよハ走馬燈そうまどうの輪廻りんじゆりて尽つる。あは。只ただ夫おのの理ことわりのささむ。善惡應報ぜんあくおうえうの虚うそハ。亦また環たまの遠とほ

るが如し。一善進めば一悪退く。便是正路あり。倘悪人時と得て行はる  
とあるはあれは。善者隠せざることを得ず。此は是邪徑之。猶勅風猛雨の五  
穀と破り。瘴氣毒水の魚鼈と害と。亦何ぞ異なるべき。然れども天運正  
路は復りて。日月隈なく照まると。何れも悪棍亡びて。善人榮え。其名両なぐ  
らせし胎りて。後車の警よ。做する者。彼西門屋啓十郎。多金阿蓮等。幾層の  
歹人。一旦不義の富と做せしむ。大原武二郎。武松。孝悌義勇の大刀風よ  
交盡さる。大團圓まで。知音の為ふとのせいの。刊行中絶ある。今  
や發兌の時至りぬと。甘泉堂の求るまふ。十集揃の全書と。一たる  
終りらりて。作者の用心。始より一て意味あると。有眼不具。眼乖不乖。知  
るを知らぬも。推並て。拍掌驚奇せざるを。かかると。みの書の終りと。亦始

より。正木の蔓繰り返して。長く久しく世の看官。不弄る。幸らむ。うと。  
手前勝手。一壽たの。筆と代書。一任せ。序を

第五十三 女郎花五色石基

在昔楚國。干將とりの。鍛冶あり。其妻と嫫耶とりの。時よ楚王の妃。彼身  
肥る故。夏日の暑ふ堪む。日夜鐵の柱と抱き。快と思ふ程。遂に孕  
て。鍊丸と生ぬ。楚王其鐵とりて。干將嫫耶。一劍二口。成作らむ。その陰陽  
の二劍と。干將嫫耶と名づきたる。干將をけ。一劍を楚王よ。献せ。残る一  
劍と秘して。出さず。王是と知り。怒て。干將嫫耶と殺しぬ。干將の子の名  
を赤と。眉間の廣さ一尺。なり。たれば。時の人。綽號して。眉間尺と。喚做  
し。王亦是と知り。赤と殺さ。欲を。事甚急あり。赤彼劍と抱て



逃て山中に在り。親の仇の報ひがたきを悲みて。且歌ひ且泣ぬ。其時客あり。赤く告て道く。汝を以て劍と汝の首とを吾に授まべ。吾汝の爲に楚王を殺して。怨を復さんとす。赤飲びてみづく。刃ぬけり。然もどもその死骸倒る。客則ち死骸に向ひて。吾汝を叛らざると誓ひし。即倒る。客其劍と赤く首とを齎して。楚王に告て實檢と請へり。王赤く首を見ろ小猶生るがごとし。客亦王を薦めて煮さしむ。既も煮ると三日三夜ありて。その首爛る。王訝りて釜の蓋を開うせ。とぐ。是を見まく。まる時。客を以て背よりて。劍を抜て王を撃べ。王の首釜中へ落ち。匣りて戦ふ者も似たり。客是と見て亦自ら刎ねて。三頭釜の中へ匣りて。爛る。とりし話の。瑯琊代醉篇に見えり。實は伍子胥の支よ由りて。作設け

る當初の小説。是と此の土ふり所の。眉間尺巴の敵の権輿ありと欲搜神記卷の十二ふを。赤くことと載されども。その畧文のみ。然るを太平記大塔宮の土牢の段。右の全文と引用せられ。世の人今へとよく知るなり。吾亦件の事とりて。本篇は撮合して。胎を奪ひ骨と換て。りて一種の主稿とす。又唐山の俗語小説。五色石の書の名を借て。女郎花五色石臺と命るよ。一の章魚の櫻者。石決明の醋貝。堅き所も柔くみちる。細工も流々。結局まで看べ。諸君子作者の用意を知らん。まゝ五六集續出さる。長物語の緒とけ。曳初る春霞。四方の長視とたのむとぞ。代書の筆をかりをあらむ。童蒙心ふたつまで。老似げなくも弱らう序を

第五十四 同續篇

邈不唐山の故事と思ふ。虞舜の貴きと帝王より。去るる年五十ふ  
 て猶親を慕ふとりの。是より大孝と云。人生を四五歳迄の乳を吸ひ  
 母と慕ふ而已。其成長る不及び。賢となく不肖となく。嗜欲好憎あると  
 と得ず。開ケ中ふ性の最まき。嘗て教を俟むて。行ひ良善ある故。孝  
 義と門閭に表せらる。名と揚げ親を顯む者。往々是なり。不肖者は是  
 と見て。例の事として羨む。一とび悪く染る不及び。放蕩不頼せざ  
 るとふ。世よ人の親たる者。各其子と慈と。愛で眷養ざらる。但克  
 く其子小教るに稀あり。此故に顔氏家訓よりらく。妻小教るに初見ふ  
 り。子小教るに童年に在り。其子の稚うり一時より。理義賞罰を正く。と  
 教訓嚴密さざれば。後よ至り亦是と。如何ともするにぬ。其子の悪

と知らざる故。愛は満と。懲を事き父子。相刺する時よ至りて。怨罵  
 と甲斐やいら。抑親の愆ちる。已茲に心なり。漫小兒戯の冊子と  
 綴りて。りて彼惑ひを醒さまく欲む。本編も亦余の前集行まて書肆復二集  
 と求むる者急あり。因て婦幼に代筆させ。稍その責を塞ぐとりの

第五十五 同續篇

鸚鵡能言へども飛鳥と離る。狸よく言へども禽獸と離る。聲色使  
 克似されども。人異あれば自声を離る。蓋人の適所は適きく自ら適く所  
 小適む。蒼蠅附驥のちる。貌も。是莊周の笑ふ所。佛も醒し易く。ざら。  
 是と無明の生酔と。文墨も亦相似する。り。數百年の下よ生ま。數  
 百年の上も奇文と。最自由は折衷して。りて一家を倣せる者。東坡の所謂

換骨奪胎博識多才是と克も。扱其次ハ剽竊摸擬古哲の佳文と竊も取り  
 て。筆小花と添るとりふ。夫よりも猶酷いなり。其世其時と同一なるがう。忌  
 憚の関へみーや。先達新奇の大筆の局と結びしもまご結むぬも。胡椒の園  
 園呑と縮丈と。りて己物と做せり。開利と走り之義と疎き。人の  
 好まふ成るとりども。譬ハ他の犢鼻褌とりて。角觝と攪るとハ鄙言と。  
 似たる者ふりつとせんとせんや。とわうりみと吾も亦。同ト田甫の瘦牛房煮と  
 り炙たりせるとぬる。巧拙十把一藤の足と。いさぐ洗得む。長生まれバ耻  
 多き。兒戯の冊子もまのまの。毫人の足迹と踏ぬ。獨酌一本生酒ハ嫌ひ  
 べりちまの甘と旨と大人気もくも。今茲の愚作ハ是のみある。五色石臺  
 女郎花。巷ハ勿論實もなりげある。第三集と綴るふと。

第五十六 同續篇

毀譽褒貶多人の好憎より出づ。或人あつ冊子と関し。爪弾いて嘲けら。女  
 子ハ柔和ふと軟弱と。織績ぎ衣と縫ひ。手書き且内と治ると良と。尚  
 女子より其勇敢義秀親衛と勝るとのりつ。バ。そ人倫の異常而已。世の  
 婦幼是と見え。羨む心なり。時を。做事毎ハ粗暴しく。良人と尻ハ布もあ  
 らん。あの故ハ甚害なり。自他の女子等眼と関て。見を聞むとく。つと  
 りひし。又人なりと。その嘲嘘と解きて曰。夫恭平の世ハ。惰夫多く。戦国小  
 ハ勇婦なり。昔唐土姫周の時孫武子ハ。呉宮ハ女兵と操り。めく非常ハ  
 備へり。况這冊子ハ。五勇婦ハ。烈女韓糸の後の身なり。遺悲と忠孝ハ果  
 せし。婦幼等是と見て。学ばまくり。むるも。企及ふべきふり。バ。惰夫を

是より由り羞て生活と奨むべく。少女も是より由り耻て浮き。娛樂と做さ  
ト。彼人情と歎唱へたる。娼娃の書と同トうらむ。何の害も是ららんや。作  
者の用心斯くの如し。已まんく。醫家敷いと歌ふらく水道の水溢て濁らば。  
戲墨の筆を洗ふべし。澄らば面よ吹被く。無明の酔を醒まし。去て亦共よ言せ。  
作者よの二論をうち聞て。腹を抱へて批して道ら。難波の浦のうらりも。身  
と尽してあを悟りもまれ。是非も看官の巧拙よらん。兒戯の冊子を論ぢるは。  
不狂人も走るふ似ら。只初春の笑草。詞の花を開かせぬ。吾も可もまなく不  
可もまなく。替らぬ處が嗚呼目出さぬ。愛さぬ哉

曲亭馬琴戲作序文集終

通俗 伊蘇普物語 全六卷

此書ハグリシヤ國ノ古話イタル。先生ノ諭言ヲ村童  
野婦ニモ解シ易キヤウ俗文ニテ譯シタル脩身教  
話ノ冊子ナリ

明治八年十一月十二日 版權免許 定價金壹圓五拾錢

勸善喻道傳 全一卷

此書ハ人々天父ノ子類ナレバ敬天為善以テ其望ミ  
ニカナヒ其恩ニムクヒサルベカラザル旨ヲ近ク取リテ譬  
ヘタル西教ノ道話本ナリ

明治十年二月廿四日 版權免許 定價金貳拾五錢

藏版人 渡部 温

賣弘書肆 全通二町目十九番地 稻田佐兵衛

東京牛込白銀町廿七番地

